

第9回海外研修／ 9th Overseas Study Tour

(於ミャンマー) ／ in Myanmar

August 2015

【日本「アジア英語」学会 ニュースレター第42号
より

Excerpt from JAF AE Newsletter , No. 42】



齋藤 智恵 (国際医療福祉大学)

2015年8月3日から6日にかけてスタディツアーが開催された。行先はミャンマーである。ミャンマーは2011年にテイン・セイン大統領が就任し、それまでの軍事政権から民主化へと舵をきった。長期に渡る実質的な鎖国状態から一転し、経済的には最後のフロンティアとして日本だけでなく世界から注目されている。

もちろん、JAF AE のスタディツアーでミャンマーを訪れるのは今回が初めてである。JAF AE の会員でもミャンマーを訪れたことのある先生は少ないだろう。もちろん自分自身も訪れたことはなかった。きっと魅力的なスタディツアーを企画できるに違いないと思った。加えて、ここ数年の間に、ミャンマーという国が身近になる出来事が重なり、ミャンマーをスタディツアーの行先に決定した。

私の勤務校ではミャンマーの医療関係者を対象に数年前に奨学金制度を設けた。複数名のミャンマー人学生が、修士課程・博士課程に籍を置いている。

様々なプログラムを通し、彼らと関わる機会が多くなるにつれ、彼らに共通する勤勉かつおらかな人柄、そして高い英語力への興味が膨らんだ。また、昨年、親しい友人でもあった元同僚が家族の仕事の都合でミャンマーに移り住んだこともミャンマーを身近に感じるきっかけとなった。

いざ、準備を進めると、学校訪問の許可を取るところか、現地の大学と連絡を取り合うのも困難を極め、2011年まで軍事政権であったことを実感することになる。勤務校の学長や国際部、そして前出の友人を巻き込んで、最終的な訪問スケジュールが決定したのは出発10日ほど前ではなかっただろうか。紙面の都合もあるので、準備段階での混乱は割愛する。このような状況の中で、ヤンゴン看護大学、ヤンゴン日本人学校が私たちの学校訪問を、ヤンゴン工科大学が学校訪問に加えて授業見学を受け入れてくださった。今回のツアーには橋内武先生、加藤三保子先生、そして古関公子先生にご参加いただいた。



ヤンゴン看護大学では、Myat Thandar学長を中心に多くの先生方にご対応いただいた。外国語に特化した大学ではないため、英語の授業は1年生のみだということであった。何よりも驚いたのはクラスサイズの大きさである。週3回実施される英語のクラスは1学年全員200名が一緒に授業を受けているとのことだった。学生数は800名だが、内500名は大学の敷地内にある寮に住んでいる。Myat Thandar学長の「この学生たちの教師であり母である」という言葉が印象的だった。

日本人学校では、萩野校長先生と英語教科担当の

渡辺先生からお話を伺った。小学校と中学校、合わせて約150名の児童生徒が通っている。教員は約30名で、英語の授業はミャンマー人のALTがサポートしているとのことだった。小学校高学年対象の英語の授業は習熟度別に3グループ（1グループ4～5名）にわけ実施されており、比較的英語力が高い生徒が多いが、両親が日本人とは限らず、日本語のサポートも必要な場合もあるとのことであった。

ヤンゴン工科大学では、10名の英語担当の教員との情報交換会、英語の授業見学と非常に充実した時間を過ごした。これらの教員たちの全てが、ミャンマー各所の大学を卒業後に、ヤンゴン工科大学の修士課程のESP 英語教育のコースを修了していた。現在、このコースは開講されていない。ヤンゴン工科大学はマンダレー工科大学と並んでCOE (Center of Excellence) 学部プログラムを2012年末より実施している。ミャンマー全土から優秀な学生を集め、他の工業系大学教員の教育機関となっている。ヤンゴン看護大学と同様に、そのクラスサイズは150名と大きい。日本とミャンマーについて2名の学生が英語でプレゼンテーションを行ったが、流暢な英語ですばらしい発表であった。最後に、橋内武先生が、私たちを代表して壇上にあがり、このすばらしい発表への感謝の意を伝えた。学生たちは非常に喜び、大きな拍手と笑顔で私たちを見送ってくれた。

私たちが訪れた8月上旬は、ミャンマーが深刻な洪水の被害に襲われていた時期と重なる。街のあちこちで、募金活動を行う学生たちの姿が見られた。ヤンゴン工科大学の授業見学の際には、150名の受講生の内、半数の学生は募金活動に出ていたため全員が揃っていないことを担当教員である Lily 先生が詫びていた。この話が象徴するように、変わりゆく政治の渦にありながらも、この国の人々はとても温かく強い。ヤンゴンで過ごす最後の夜、私たちはミャンマー料理を食べながら、この国の発展と人々の明るい未来を祈って乾杯した。